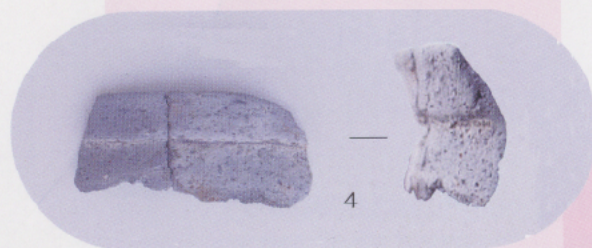
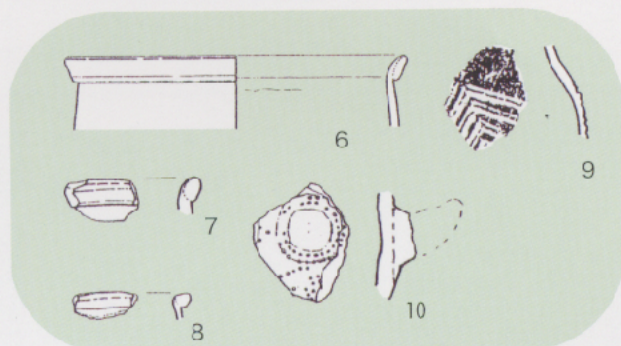


朝鮮半島系の土器

土器の中には数は多くないが、朝鮮半島から出土する無文土器に類した壺や甕が10点ほどみつかっている。これらの土器は朝鮮半島で出土する無文土器そのものではないが、渡来集団か系譜を引く人々によって作られた土器と考えられる。粘土紐か帯を口縁端部に貼り巡らした甕1・5・6・7・8や薄手の作りで鉢かと考えられる4、口縁部が短く外弯した丸底の壺2、外広がりの体部に付く口縁部が著しく歪む甕3のほか、雷文風の文様が施された壺の胴部片9や無数の刺突文を施した牛角状突起と思われる把手片10などがある。このほか、松菊里型土器に類したものも出土している。このうち、5～9は弥生時代前期後半の土器と共伴し、朝鮮半島の後期無文土器と平行するもので、粘土紐・帯を巡らす甕6～7は北部九州を中心にして西日本に広がっている。これに対して、前期前半の土器と共伴していた一時期古い1～4の土器は、この時期のものとしてはいまのところ朝鮮半島南部では類例が少なく、中でも口縁部に粘土帯を巡らす1や4は北西朝鮮あたりの土器と類した特徴をもっている。



5



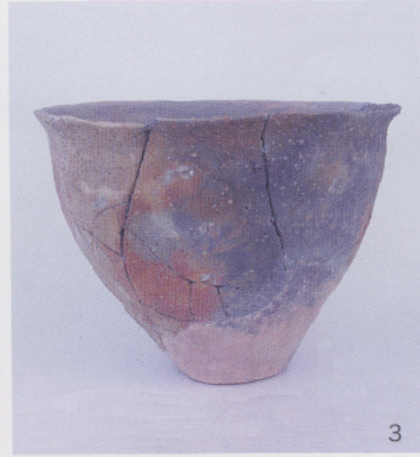
4



1



2



3